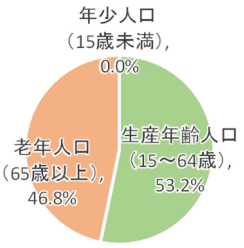
藤　尾（ふじお）

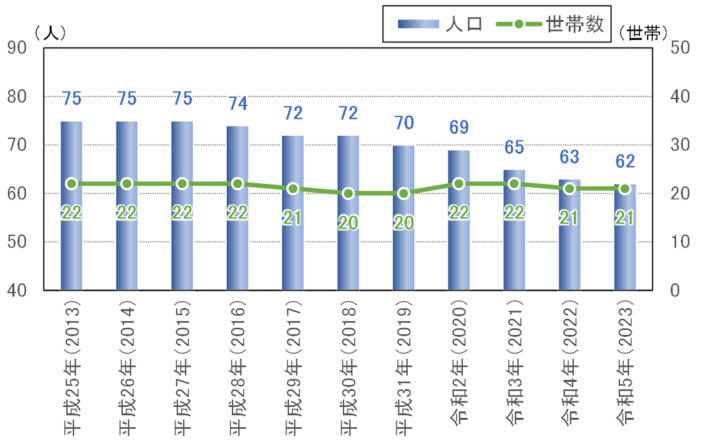
人口・世帯数等（令和５年４月）

人　　口	62 人
世 帯 数	21 世帯
高齢化率	46.8 %

年齢別人口割合



人口・世帯数の推移（過去10年間）



区域の概要

立　　地　集落の周囲は山が迫り、北西側と東側に田畑がやや開ける。集落の中を流れる久斗川が東側から流入し北側に大きく迂回する位置にあり、川を挟んで集落が南北に二分されている。集落の中を県道山田新温泉線が走る。

地名由来　『地名用語辞典』によると、藤は渕、縁（ふち）とあり、藤の字を借りたものとする。ここから、『和名類聚抄』にのる久斗郷の先端「ふち」に山の「尾」がついたものとも考えられる。（「たじま地名考」日本海新聞）なお、「但馬郷名記」には布留尾（うるお）と記されている。（「角川日本地名大辞典」）

歴 史 等　辺地村の枝郷であり、江戸末期頃までに分村して成立したと思われる。分村前の辺地村は、豊臣政権下では太閤蔵入地（豊臣氏の直轄地）で、江戸時代には、慶長10年（1605）旗本宮城氏知行、正保元年（1645）幕府領、寛文8年（1668）からは豊岡藩領となった。分村後の藤尾村は豊岡藩領。享保19年（1734）の辺地村鹿間山山論の中にはじめて藤尾の名が見え、宝暦5年（1755）の山論では、辺地村と並んで藤尾在として記され、宝暦12・14年（1762・1764）の亀谷山山論の中では、辺地村の枝郷藤尾村とある。

明治7年（1874）に鹿間村を合併する。明治22年（1889）大庭村の大字となり、昭和29年（1954）からは浜坂町の大字となる。明治24年（1891）の戸数48、人口は男142・女130。

これまで把握している文化財

文化財の件数　20 件　（うち指定等文化財　0 件）

大分類	中分類	小分類	把握件数			指定等
有形文化財	建造物	建築物	0	1	3	0
		石造物	0			0
		工作物・その他の構造物	1			0
	美術工芸品	彫刻	1	2		0
		絵画	0			0
		工芸品	0			0
		書跡・典籍	0			0
		古文書・歴史資料・考古資料	1			0
無形文化財		音楽	1	1		0
		演劇	0			0
		工芸技術	0			0
		その他の無形文化財	0			0
民俗文化財	有形の民俗文化財	信仰の場	8	8	12	0
		祭具	0			0
		民具	0			0
		その他の有形の民俗文化財	0			0
	無形の民俗文化財	年中行事・民俗芸能	3	4		0
		民俗技術	0			0
		食文化	0			0
		民間説話・俗信	1			0
		その他の無形の民俗文化財	0			0
記念物	遺跡	散布地・集落跡・生産遺跡	2	3	4	0
		古墳・その他の墓	0			0
		城館跡・寺社跡	0			0
		街道・古道等	1			0
		戦争遺跡	0			0
		その他の遺跡	0			0
	名勝地	山岳・高原・丘陵	0	1		0
		海岸・海浜・島嶼	0			0
		河川・滝・渓谷・湖沼	1			0
		公園・庭園	0			0
		その他の名勝地	0			0
	動物・植物・地質鉱物	動物	0	0		0
		植物	0			0
		地質鉱物	0			0
文化的景観		生活･生業･風土により形成された景観地	0			0
伝統的建造物群		宿場町・城下町・農漁村等	0			0

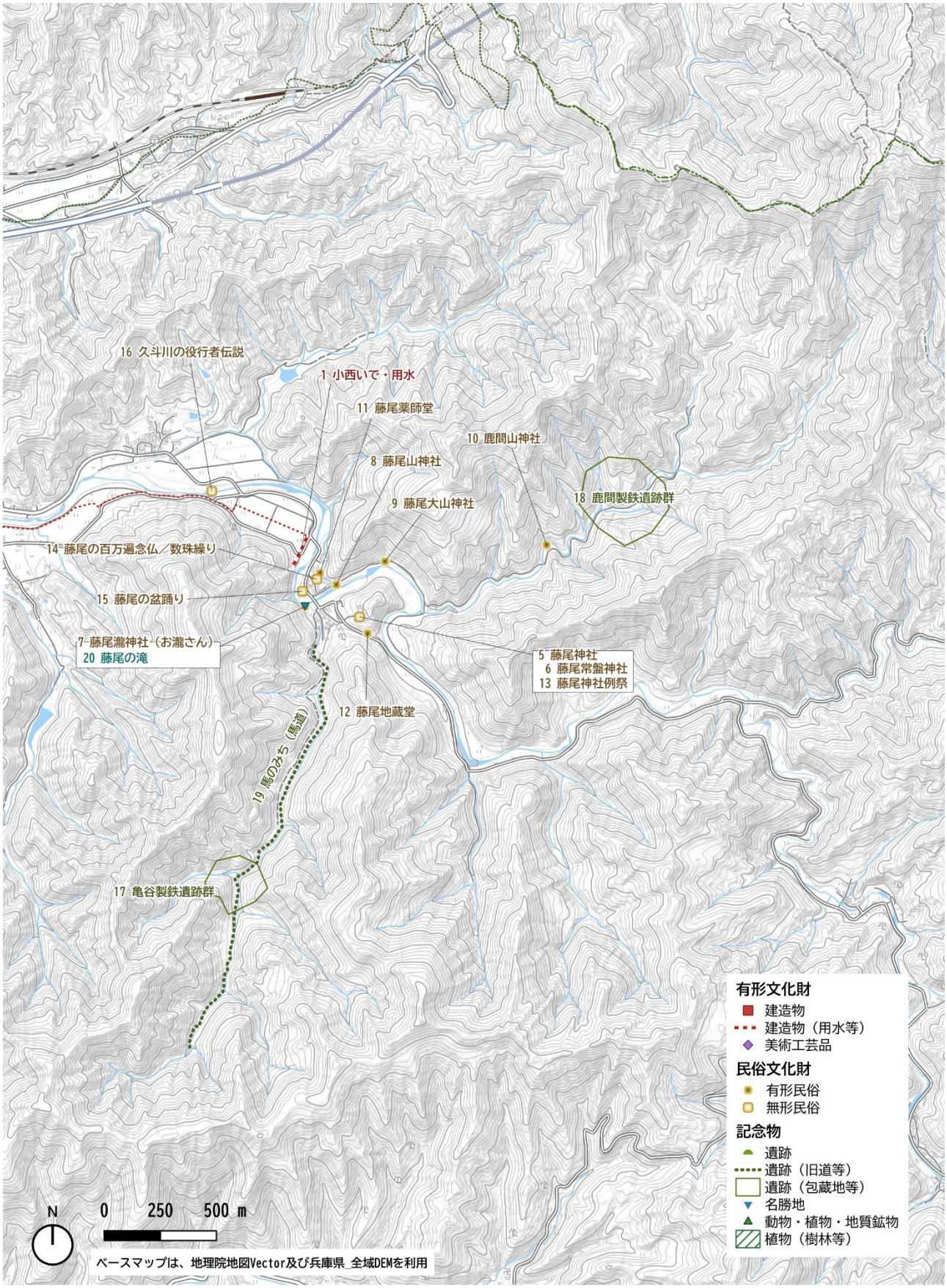
藤尾神社

藤尾地蔵堂（たわ坂地蔵堂）

藤尾薬師堂

※人口・世帯数は住民基本台帳（令和５年４月現在）による。

文化財の分布



※所在地の掲載可能なものに限る

2－17 藤尾

文化財の一覧

■ 有形文化財／建造物

分類	番号	名称	概要
工作物・ その他の 構造物	1	小西いで・用水	辺地一帯は、長年水不足に悩まされた地域であった。江戸末期の安政年間（1855～1860）、当地の小西安兵衛が、用水路の建設に取り掛かかった。工事は、豊岡藩からの財政的援助や役人の派遣等のもと、当時因幡・但馬で多くの用水路工事を手掛けていた八田村の「黒鍬組」も参加して進められた。しかし、工事の最中に時代が明治へと変わり、豊岡藩からの借用金の即刻返還が必要となるなど、工事の存続が危ぶまれた。この時、安兵衛が私財をなげうって工事を続行させ、明治 4 年（1872）頃、全長約 1km、一部が田の下の深さ 4mを通り、底板・横板・天井板の 4 枚の石板で構成された、他に例を見ない大規模な用水路が完成した。その後小西家は辺地を離れたが、昭和初期頃までは天隣寺（対田）において、年に一度「小西おどり」が行われていたと伝わる。

■ 有形文化財／美術工芸品

分類	番号	名称	概要
彫刻	2	藤尾の薬師如来像	江戸時代の木造仏と思われ、藤尾薬師堂内に安置されている。古来より眼病平癒の「目の神様」として信仰されている。
古文書・ 歴史資料・ 考古資料	3	大森佐吉文書	宝暦 5 年（1755）鹿間山論裁許状他文書。（文書の所在は不明）

■ 無形文化財

分類	番号	名称	概要
音楽	4	藤尾の盆踊り唄	※『但馬二方の民間芸能』（昭和 56 年、大森恵子著、但馬民俗芸能研究会・浜坂町教育委員会発行）p139 参照

■ 民俗文化財／有形の民俗文化財

分類	番号	名称	概要
信仰の場	5	藤尾神社	祭神は素戔嗚神。創立年月は不明。明治 6 年（1873）10 月に村社に列せられる。境内社には、稲荷神社（保食神）がある。
	6	藤尾常盤神社	近代社格は無格社。昭和 21 年（1946）藤尾神社(藤尾 439-9)に合祀(他に十二所神社も合祀し、三社が祀られている)。藤尾神社鳥居付近に、神社の謂れを記した碑がある。
	7	藤尾瀧神社（お瀧さん）	藤尾の滝の側に位置する。近代社格は無格社。
	8	藤尾山神社	近代社格は無格社。藤尾 539 地先の大杉の根元付近に石碑がある。刻字は「藤尾山神社」で、昭和 60 年（1985）に建立されたものである。
	9	藤尾大山神社	近代社格は無格社。
	10	鹿間山神社	藤尾地区の手前の道を鹿間川に沿って上がった先に、廃村となった鹿間地区がある。旧鹿間村手前に山上大明神を祀る山神社がある。現在は株本産業㈱が所有管理し、毎年 10 月に例祭が行われている。
	11	藤尾薬師堂	旧薬師堂は、平成 2 年（1990）の台風 19 号による土砂崩れで壊滅。安置されていた薬師如来像は無事で、平成 3 年（1991）に同敷地内に薬師堂を再建して現在に至る。藤尾地区では、お日待ち、数珠繰り・高齢者サロン、百歳体操など、地域の多目的に利用されている。
	12	藤尾地蔵堂	たわ坂地蔵堂とも呼ばれる。コンクリートブロックに切妻で瓦屋根をかけた小祠に厨子 2 つが安置されている。

■ 民俗文化財／無形の民俗文化財

分類	番号	名称	概要
年中行事・民俗芸能	13	藤尾神社例祭	10 月 1 日に藤尾神社で行われる。
	14	藤尾の百万遍念仏／数珠繰り	疫病（疫神）送りの行事の一つ。「仏の口開け」「くり」とも呼ぶ。1 月 16 日に老人と子ども達が薬師堂に集まり、「ナンマンドー、ナンマンドー、仏さんの口あけだ」と唱えながら数珠をまわす。1,110 回数珠を繰り終えた後、この数珠の中に男の子達が入って御幣を片手に藤尾神社、上の村境、上住の各家、鹿間谷口、下住の各家、下の村境の順で回る。神社境内と 3 ヵ所の村境で、「わるい病は天にあがれ」と言いながら数珠を頭上に 3 回投げ上げ、落ちて来る数珠を御幣で受け止める。3 ヵ所の村境では「百万遍　南無阿弥陀仏　御祈祷之札」と書かれた長い御幣を立てる。
	15	藤尾の盆踊り	その年の村の新仏の小型墓（造り物）や位牌を集めて並べ、祭り供養すると同時に、その前で盆踊りを踊る形態を伝える。
民間説話・俗信	16	久斗川の役行者伝説	※『ふるさと浜坂シリーズ 1「ふるさと浜坂散歩みち」』（平成 4 年、浜坂町教育委員会発行）p121 参照

■ 記念物／遺跡

分類	番号	名称	概要
散布地・集落跡・生産遺跡等	17	亀谷製鉄遺跡群	幕府直轄地の鉄山。主な操業時期は寛文 20 年（1643）～万治 2 年（1659）。経営者は塩屋庄太郎左衛門。伊角・今岡・金屋あたりからとった砂鉄を馬にのせて亀谷に運んだと伝わる。
	18	鹿間製鉄遺跡群	豊岡藩領の鉄山。主な操業時期は寛文 11 年（1671）～元禄 13 年（1700）。経営者は伯州久瀬屋平兵衛。寛文 11 年に温泉町金屋の彦右衛門・嘉右衛門の 2 人が鉄製錬用の炭焼きのために入植したのが始まりとされる。
街道・古道等	19	馬のみち（馬道）	伊角・今岡・金屋のあたりからとった砂鉄を、馬にのせて亀谷に運んだといわれている。馬道と呼ばれ、雪が積もった頃には、この馬道がくっきりと浮き出してみることができる。

■ 記念物／名勝地

分類	番号	名称	概要
河川・滝・渓谷・湖沼	20	藤尾の滝	久斗川の曲流部と支流亀谷川の合流部にできた小滝。清流が絶えることなく注ぐ。傍らにはお滝神社の社殿跡があり、滝壺には円礫が堆積していることから、この滝壺は田井の浜につながるという伝説がある。